

幼兒の自己發達

東京高等師範學校講師 丸 山 良 二

兒童は生れながらにして自己發達的である。自己を保存し自己を發展させる性質は、兒童が天賦的に内具することである。而もこの内的性質は外界からの刺戟がなくては實現されない。

身體にしても成長するといふ性質は兒童が天賦的にもつて生まれるのである。併し外部から榮養や溫度や日光を與へなかつたならば、身體は成長しない。外的刺戟さへあれば、または外的刺戟さへよければ、よく成長するといふに決して然うではない。嬰兒に牛肉や大豆や御飯を與へても殆んぎ消化しないから彼等の成長の助けとはならぬ。むしろ時として害となる。外的刺戟は内の發達と相適應しなければならぬ。

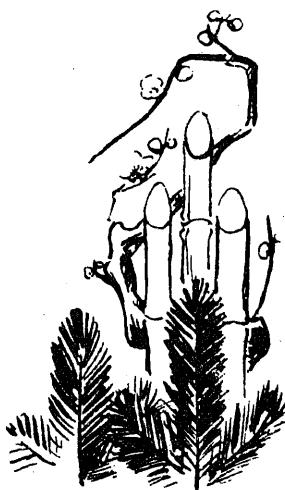
精神的の發達と刺戟についても全く同様である。内的要求があるからして、外から與へたものを攝取するのであ

る。嬰兒に對して我々成人が與へてゐる外的刺戟は日々實に數多いのであるが、それが嬰兒の感官を通じて脳裏に納められてゐるものは、極めて少いといつてよい。これは嬰兒の精神發達が漠然とした未分化の狀態に附て、未だ外界の複雑な組織を有する事物や事件を了解するだけに發達してゐないからである。嬰兒が「アア」「ブブ」「ウウウ」などといふ自發的の囁語をいふやうになつてから、始めて我々は「マンマ」「トト」「ハイチ」となさの有意味の語を學習させることが出来る。

嬰兒の内的發達を覺醒させるものは、外的刺戟であるが、その覺醒がなければ、外的刺戟は彼等の行動組織の中に攝取されない。即ち意味のあるものとならない。こゝに於て我々は、兒童がよく了解しよく消化しよく攝取しよく組織化するものは、彼等の心身の發達によく適してゐるか

らだご推定して差支へない。かういふ考へから出發して、幼兒の好むもの、行ふものを、選ぶものを調べ、その事實事件の組織的性質を吟味するならば、兒童の内的發達程度を推察し得るであらう。六七歳の幼兒は童話お伽噺を好む。童話お伽噺はその舞臺といひ、その登場人物といひ共に想像的のもので、而も事件は急速度に展開して何等現實性を帶びて居ない。やはり想像的である。かういふやうな想像的のお話を好むは、この頃の兒童の内的發達の特質が想像的であるからだご推定するが如きはその一例である。

教育は一面では理想へ導くのであるが、これは同時に兒童の内的發達に適應してゐなくては、彼等を眞に導くことは出來ない。兒童の心理といふ立場からいへば、兒童の心意發達の段階を調べて、その大凡を知つてゐることが大切である。兒童に自由畫を描かせて、これによつて兒童の内部をのぞいてみることも出来る。また彼等の話してゐる言葉を蒐録して、それからこれを整理してみても發達段階を伺ふことが出来る。また一定の繪畫を觀察させて、これを取去り、それから繪について見たところを述べさせても



これが出来るのである。大きい兒童であるごと圖畫、作文などの成績によつてその發達を推知し得るわけである。かかる研究に於て、最も大切であつて而も最も困難なことは、蒐集した材料から、特質を發見することである。兒童の内部發達に適應する特質を洞察することは、餘程修養のある人でない出来ない。これが出来ればその道の専門學者である。併し一度示されしごころを學ぶことは我々凡人でも爲し得る。これを知つて幼兒保育の任に當ることは一つの大切な條件である。